

# 美馬市木屋平の峠とお堂と庚申信仰

民俗班 (徳島民俗学会)

橋 禎男<sup>\*1</sup> 坂本 憲一<sup>\*2</sup>

**要旨：**美馬市木屋平の庚申信仰を調査するため、お堂と石仏を探して村内を巡った。その結果、木屋平には多数の庚申塔や青面金剛像が残っていることがわかり、江戸時代から昭和初期にかけて、庚申信仰が大変盛んだったことが裏付けられた。また、木像の青面金剛像は、川井以南のお堂に集中して祀られていることがわかった。

**キーワード：**峠、お堂、青面金剛、庚申塔、庚申信仰

## 1. はじめに

庚申信仰とは、60日に1回巡ってくる<sup>かのえ さる</sup>庚申の日に徹夜して語り合い、健康長寿や五穀豊穡を祈願する信仰行事のことで、講を組んで行うのが普通であった。もしこの夜眠っていると、人間の体内にいる<sup>さんご</sup>三戸という虫が抜け出して、その人の罪過を天帝に告げるため寿命が縮まるとされた。庚申信仰は奈良時代に中国から伝えられ、初めは貴族が中心の遊びであったが、江戸時代になると庶民化して広く民間でも行われるようになった。

今回の調査は、旧木屋平村の庚申信仰を中心とした民間信仰を明らかにすることを目的として、同時に暮らしの中で重要な役割を果たしてきた峠や旧道についても調べた。調査は、平成19年7月29日から、20年1月17日までの中の19日間である。

## 2. 木屋平の峠とお堂

### 1) 木屋平の峠一覽

木屋平の峠を表1に、その位置を図1に示した。これをみると、峠は村内には少なく殆ど村境にあって外部との交流に利用されたことがわかる。

県下の峠を見ると、その3分の2に石造物が祀ら

れているが、木屋平では前年調査の東祖谷に比べて石造物が少ないことがわかった。それは主要な峠が東祖谷の場合より低く、民家が峠近くまであったので、峠を越える危険や不安が少なかったためと考えられる。

### 2) 主な峠と石造物

#### ①川井峠 標高770m

川井と神山町上分を結ぶ峠で、昭和41年川井トンネルが開通するまで、川井の人々は峠を徒歩で越えて上分へ出ていた。また、徳島や美郷、神山から剣山への登山ルートとしてもよく利用された。峠には、「劔山道 是より百七十九丁 世話人 東山重五良」と刻まれた道標が残っている。

#### ②燧ノ窪峠 標高755m

三ツ木と美郷の中村山を結ぶ峠で、峠の南側に位置する木中、二戸、今丸、野々脇は、昭和30年までは中枝村大字中村山に入っていた。これらの集落や三ツ木の人々にとって、この峠は徳島への本街道であった。剣山登山にも利用された峠には地蔵堂が残っているが、2体の地蔵尊は現在中村山の真福寺に保管されている。

#### ③杖立峠 標高1,049m

太合と穴吹町古宮を結ぶこの峠も、剣山参拝道と

\*1 徳島市国府町日開42-5 \*2 阿波市市場町八幡字町屋敷41

してよく利用された。峠に石仏はないが、登山者が杖を立てた場所は「杖の森」といわれ木が茂っていたが、平成5年に林道が開通したため、樹木は伐採されて昔の峠の面影は消えてしまった。

### 3) お堂と仏像

木屋平のお堂と仏像一覧を表2に、その位置を図1に示した。お堂は廃堂になったものもあるが村内

の殆どの集落に存在していて、以下に述べるように信仰、娯楽、集会の場として共同体に欠かせない施設であった。

祀られている仏像は、東祖谷と共通しているものも多いが、大師像が最も多かった東祖谷に対して、木屋平では地藏菩薩が25基と最多であった。また東祖谷のお堂には見られなかった青面金剛像が、木屋平地区に集中して多かったことは特記すべきことである。

表1 美馬市木屋平の峠一覧

	峠名	標高m	連絡地	石仏の有無と種類
A	川井峠	770	川井上分	道標
B	木戸峠	775	川井奥屋成	
C	川成峠	1,310	弓道川	
D	当野石峠	1,490	川上岩倉	
E	日奈田峠	1,346	川上岩倉	
F	肉測峠	1,335	富士ノ池	
G	見越	1,450	川上名頃	
H	犬石峠	1,100	川上川又	
I	保賀山峠	1,130	太合川又	道標
J	杖立峠	1,049	太合古宮	
K	燧ヶ窪峠	755	三ツ木中村山	地藏
L	横山峠	795	野々脇横山	
M	野々脇峠	825	野々脇北谷	道標
N	二戸峠	890	二戸江畠	
O	杖谷ノタオ	545	杖谷樫原	庚申塔
P	南張峠	560	樫谷南張	
Q	野田ノタオ	480	森藤内川地	地藏 観音 庚申塔

### 3. 木屋平のお堂と青面金剛

#### 1) 堂内の青面金剛像について

木屋平のお堂は、藩政期を通じて氏子や信者によって守られ、氏子繁昌・子孫繁栄・五穀豊穡・悪病退散を祈願して虫祈祷や百万遍、庚申祭りや護摩供養などの行事、また集落の会合や集会、盆踊りの場としても利用されてきた。建物は、草屋（現在はトタンで覆う）方二間～四間の小さなお堂で、本尊は仏壇中央の厨子に納められ、その左右に数体の脇仏

#### お堂 (○)

●：青面金剛像を祀っているお堂

1	地藏堂	桑柄	27	地藏堂	森遠
2	観音堂	葛尾	28	地藏堂	弓道
3	不動堂	榎原カゴミ	29	観音堂	谷口カケ
4	不動堂	榎原本名	30	地藏堂	谷口カケ
5	阿弥陀堂	榎原	31	薬師堂	太合
6	観音堂	大久保	32	阿弥陀堂	太合奥
7	大師堂	桐久保	33	地藏堂	太合中央
8	大師堂	今丸	34	地藏堂	太合寺内
9	地藏堂	今丸	35	地藏堂	太合桃敷
10	観音堂	木中	36	不動堂	川上東
11	地藏堂	市初	37	地藏堂	川上仲市
12	阿弥陀堂	二戸	38	地藏堂	川上名賀
13	大師堂	三ツ木	39	阿弥陀堂	川上妙見
14	地藏堂	南張			
15	不動堂	貢横石			
16	観音堂	イゲンギョ			
17	大師堂	大北天行院			
18	地藏堂	川井下			
19	薬師堂	樫木			
20	観音堂	麻衣尾			
21	阿弥陀堂	竹尾			
22	薬師堂	川原			
23	阿弥陀堂	内川地			
24	阿弥陀堂	下名			
25	阿弥陀堂	八幡			
26	地藏堂	八幡瀬津原			

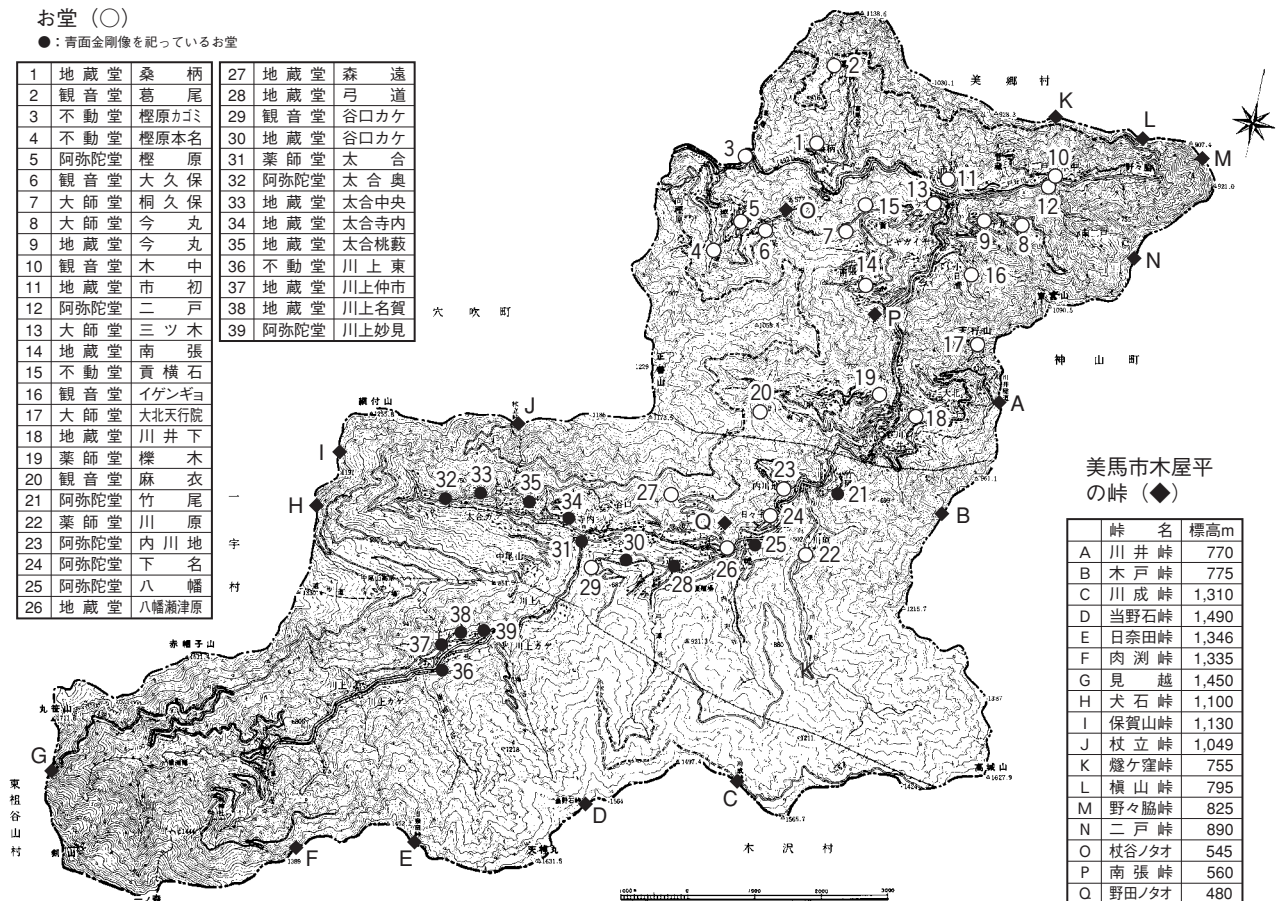


図1 美馬市木屋平の峠とお堂所在地

表2 美馬市木屋平のお堂と仏像一覧

番号	お堂名	所在地	仏 像 (お 堂 内)							お堂外(石仏)			
			阿弥陀如来	弘法大師	地藏菩薩	薬師如来	観音菩薩	不動明王	毘沙門天	青面金剛	備 考	庚申塔	その他
1	地藏堂	桑柄			□●		●			×	六地藏(木像)	1	
2	観音堂	葛尾					●			×		2	
3	不動堂	檜原カゴミ						■		×			
4	不動堂	檜原本名						■		×			
5	阿弥陀堂	檜原	●	○	○			○		×		3	大1五6
6	観音堂	大久保					●			×	3体	2	大1五1板3
7	大師堂	桐久保		●						×			
8	大師堂	今丸		■						×	※		
9	地藏堂	今丸			●					×	六地藏※		
10	観音堂	木中		○	○		●	○	○	×	※		五1板4
11	地藏堂	市初			●					×			地1
12	阿弥陀堂	二戸	●							×	2体※		五2板4
13	大師堂	三ツ木		●						×	2体※		
14	地藏堂	南張		○	●					×		5	五1板4
15	不動堂	貢横石						●	○	×		3	
16	観音堂	イゲンギョ						●		×			
17	大師堂	大北天行院		●	□			□		×	大日如来		地1
18	地藏堂	川井下			■					×			
19	薬師堂	樺木				■				×	2体	2	
20	観音堂	麻衣						●		×			板6
21	阿弥陀堂	竹尾	●	○	○			○		○			板6
22	薬師堂	川原				●				×			
23	阿弥陀堂	内川地	●	○	○			○	○	×	2体(大・地)	2	板6
24	阿弥陀堂	下名	●	○				○	○	×		2	五6
25	阿弥陀堂	八幡	●							○			
26	地藏堂	八幡瀬津原			●					×		5	
27	地藏堂	森遠			●					×			
28	地藏堂	弓道		○	●			○	○	○		3	地2大2
29	観音堂	谷口カケ			○			●		×		2	
30	地藏堂	谷口カケ		○	●			○	○	○		2	五3板1
31	薬師堂	太合		○	○	●		○	○	○		1	
32	阿弥陀堂	太合奥	■板	□						□	5基		板1
33	地藏堂	太合中央		○	●					○			
34	地藏堂	太合寺内		○	●					○		1	五1
35	地藏堂	太合桃藪		○	●					○		1	地1
36	不動堂	川上東						●		○	お堂流失	1	
37	地藏堂	川上仲市			●					○		1	
38	地藏堂	川上名賀			●					○	六地藏		
39	阿弥陀堂	川上妙見	●	○	○	○		○	○	○			
	小 計		8	18	22	4	10	12	7	13		38	
廃堂 (庵)	龍華庵	川井	○				○	○	○	○	釈迦如来	2	
	大師堂	川上日比宇		●	○			□		○	39に合祀		
	観音堂	川上					■			○	29に移転		
	不動堂	大北						●		○	極楽寺に保管	2	
	大御堂	谷口	●		○	○	○	○	○	×	竜光寺に保管		
	観音堂	向檜原					●						
	中屋内堂	向檜原				●							
	観音堂	菅蔵					●			×	※		
地藏堂	野々脇			●					×	※			
合 計			10	19	25	6	15	16	9	17		42	

(注) ●○：木像 ■□：石像 (●■は本尊) 地：地藏 大：弘法大師 五：五輪塔 板：板碑 ※：真福寺(吉野川市美郷)で保管

が祀られている。本尊には、地藏菩薩・阿弥陀如来・薬師如来・弘法大師・不動明王などがあり、地元ではこれらの本尊がそのまま堂名になっている。

青面金剛は、元来は鬼病を流行させる神であったが、後に善神となり病魔悪鬼を退散させるために修された。その形像は多数の手を持ち、顔は忿怒相、髪は怒髪、頭に髑髏を頂き、胸を髑髏の瓔珞で飾る。手は四臂・六臂があり、宝剣・弓矢・輪宝・絹索・

三叉鉾などを持つ。また、シウケラ(女人)の髪をつかむのも特徴である。中世以降道教思想と混淆して庚申信仰の本尊として祀られるようになる。堂内にある青面金剛像は、本尊仏としてではなく脇仏として祀られ、向かって左側(一部は右側)の厨子内に納められている場合が多く、極彩色で大半が江戸期に造られたものである。

## 2) 青面金剛像三例

### ①竹尾阿弥陀堂の青面金剛像 (図2)

像高40cm, 青身で怒髪, 忿怒相で頭には鬚髻をいただき, 四臂, 手には輪宝・絹索・三叉鉞を持つ。脇には合掌した猿, 手を膝においた猿二体と鶏二体を配する。後部の火焰光背には「奉供養庚申本尊元禄十三年辰歴五月廿八日入仏阿闍梨宏清極楽寺」「奉伽願主阿部権内弥助園明院」の墨書銘がある。祭壇の右側壁には, くり猿が奉納されている。

### ②太合寺内地蔵堂の青面金剛像 (図3)

像高47cmで青身, 怒髪と忿怒相。四臂で頭には鬚髻をいただき, 条帛をまとい腰前には虎革の虎皮裙を付ける。手には宝剣・他の手の持物は欠失。邪鬼を踏み大振りの三猿二鶏 (一部欠失) を配する。棟札には, 「奉納新造青面金剛厨子一字入仏龍光現住持道義法印欽白」「奉新造興青面金剛童子一軀入仏龍光 (寺) 道義法印仏師道寛造」とあり, 像は仏師道寛によって造られ, 入仏祭主は竜光寺の僧道義が勤めたことがわかる。

### ③川上妙見阿弥陀堂の青面金剛像 (図4)

像高51cmで青身, 怒髪・忿怒相で迫力に富む。四臂で宝剣・絹索・三叉鉞を持ち, 邪鬼を踏む。背後には火焰光背と金属の打ち抜き光背があり, 脇には三猿二鶏を配する。明治期の仏壇師の手になる総漆塗りの豪華な厨子に安置されている。

## 3) 川井以南に集中する青面金剛像

木屋平のお堂を表2から分類すると, 地藏堂14(15), 阿弥陀堂8, 観音堂6(9), 大師堂4(5), 不動堂4(5), 薬師堂3となる。青面金剛像が脇仏として祀られているお堂は全部で17(廃庵・堂含む)で, 地藏堂が最も多く7, 次は阿弥陀堂4, 不動堂2, 薬師堂と観音堂と大師堂1, その他1となる。

青面金剛像を祀るお堂の分布を図1で見ると, 竹尾・八幡・弓道・谷口カケ・太合・太合中央・太合寺内・太合桃藪・川上東・川上仲市・川上名賀・川上妙見にある各お堂が祀り, 他の地区のお堂には祀られていない。すなわち, 川井以南に集中して存在し, 以北にはないので, 青面金剛像の分布は川井地区を境に見事に一線を画することができる。

ところで, 川井以南のお堂に青面金剛像が集中している理由は何だろうか。当初は峠を越えて他町村



図2 竹尾阿弥陀堂の青面金剛像



図3 太合寺内地蔵堂の青面金剛像



図4 川上阿弥陀堂の青面金剛像

からの影響があったと考え、神山町、吉野川市美郷、つるぎ町一字の隣接地域の事例を調査してみたが、神山町に一例あるだけで他にはなく、他町村からの影響はまず考えられなかった。

表4の庚申塔造立年代から、村内に庚申信仰が盛んになるのが寛文・元禄頃からとわかるが、今回の調査では、堂内の青面金剛像は前述の三例が示すように、古くは元禄期の造立である。また、遺されているお堂の棟札は、仏事を掌っているのは極楽寺と龍光寺であることを示している。さらに、お堂の規模を『木屋平村史』(1996)の「氏堂と庵」の項を参考に比較して実見すると、川井以北より以南が大きいことが窺えた。したがって、庚申信仰への意識が高まるにつれ、地域の経済力に仏事を掌る寺側の指導が加わり、川井以南に青面金剛像が集中的に普及していったと考えるのがごく自然であろう。

#### 4. 木屋平の庚申塔と庚申信仰

##### 1) 木屋平の庚申塔分布

木屋平の庚申塔一覧を表3に示した。村内の庚申塔については、昭和46年の村史発行の際、芝原富士夫氏が調査した結果が村史にあるので今回はそれを参考にした。村史には105基の庚申塔の記載があるが、今回調査をすると不明のものもかなりあり、確認できたのは表3の通り78基に止まった。

庚申塔の種類では、青面金剛像が50基と最も多く、次いで「奉供養庚申待二世安楽也」「奉供養庚申誦」などを刻んだ文字塔が24基であった。文字塔の青面金剛はなく、猿田彦は文字塔2、刻像塔2と少なかった。

##### 2) 庚申塔三例

###### ①杖谷ノタオの青面金剛 (図5)

寛文3年(1663)の造立で、高さ78cm。笠付形で、6臂、三猿と二鶏を配し、村内の庚申塔で最も古い。なお、この峠には3基の庚申塔がある。

###### ②川井の文字塔 (図6)

川井峠に通じる旧道と国道が交わる場所に立つ。寛文8年(1668)の造立で、高さ105cm、「奉為青面金剛庚申供養 現世安穩後生善所」の銘文から、当時の村人の祈願内容を読みとることができる。他に、石造物4体と県指定天然記念物のヒイラギがある。

###### ③谷口の猿田彦文字塔 (図7)

谷口神社横に立つ。猿田彦が庚申として登場するのは江戸後期からで、これは昭和21年(1946)の造立で、木屋平の庚申塔では最も新しい。高さ46cm、先端が尖った剣形である。猿田彦は神話に道案内の神として登場するので、路傍や神社に立つことが多い。

##### 3) 庚申塔の造立年代

村内で確認できた78基の庚申塔の造立年代を、表4に示した。これによると、村内の庚申塔の造立は寛文期からで、県内で最も早い明暦3年(1657)造立



図5 杖谷ノタオの青面金剛



図6 川井の文字塔

表3 美馬市木屋平の庚申塔一覧

番号	所在地	種類					様式	造立年代
		文 字 塔			刻 像 塔			
		庚申待	青面金剛	猿田彦	青面金剛	猿田彦		
01	美馬市木屋平二戸				6-3-2		舟形	安永7 (1778) 8月
02	〃二戸				4-3-2		笠付	天明4 (1784) 11月
03	〃二戸	○					剣形	天和2 (1682) 11月
04	〃二戸	○					舟形	文化3 (1806) 9月
05	〃今丸	○					剣形	寛文6 (1666) 11月
06	〃今丸				4-2-2		笠付	元禄14 (1701) 10月
07	〃葛尾				4-3-2		舟形	-
08	〃葛尾					○	角形	-
09	〃桑柄				4-3-2		剣形	寛延1 (1748) 11月
10	〃大久保				6-3-0		剣形	-
11	〃大久保	○					剣形	文政3 (1820) 5月
12	〃三ツ木				6-3-2		笠付	明和9 (1772) 9月
13	〃ビヤガイチ	○					剣形	元禄7 (1694) 10月
14	〃ビヤガイチ				4-3-2		笠付	延享1 (1744) 6月
15	〃貢	○					剣形	元禄1 (1688) 12月
16	〃貢				4-2-2		剣形	享保16 (1731) 2月
17	〃貢				4-2-2		剣形	-
18	〃杖谷				6-3-2		笠付	寛文3 (1663) -
19	〃杖谷	○					剣形	寛延1 (1748) 4月
20	〃杖谷				6-3-2		自然石	文化7 (1810) 3月
21	〃樫原				6-3-2		笠付	-
22	〃樫原				4-2-2		笠付	享保□7月
23	〃樫原				6-3-2		笠付	宝暦13 (1763) 9月
24	〃向樫原	○					笠付	元禄2 (1689) 9月
25	〃向樫原				4-2-2		笠付	延享2 (1745) 10月
26	〃向樫原				6-3-2		舟形	明和1 (1764) 11月
27	〃向樫原				4-2-2		剣形	正徳5 (1715) 9月
28	〃南張	○					剣形	元禄5 (1692) 10月
29	〃南張	○					剣形	真享5 (1688) 10月
30	〃南張	○					剣形	元禄4 (1691) 11月
31	〃南張				6-3-2		剣形	宝暦7 (1757) 10月
32	〃南張				4-2-2		笠付	宝永6 (1709) 2月
33	〃南張				6-3-2		笠付	宝暦7 (1757) 3月
34	〃南張				6-3-2		剣形	寛延3 (1750) 3月
35	〃南張				6-3-2		笠付	明和7 (1770) 6月
36	〃南張			○			剣形	大正5 (1916) -
37	〃南張				4-2-2		剣形	寛保1 (1741) 12月
38	〃南張				6-3-2		笠付	明和8 (1771) 11月
39	〃樅木				4-3-2		笠付	安永3 (1774) 3月
40	〃樅木				6-3-2		その他	-
41	〃麻衣				6-3-2		剣形	昭和2 (1927) 5月
42	〃麻衣				6-3-2		笠付	安永5 (1776) 3月
43	〃麻衣				6-3-2		笠付	-
44	〃麻衣	○					剣形	元禄15 (1702) 2月
45	〃麻衣	○					剣形	延宝6 (1678) 3月
46	〃川井	○					剣形	寛文12 (1672)
47	〃川井				6-2-2		笠付	元禄□6月
48	〃川井	○					剣形	寛文8 (1668) 3月
49	〃大北				4-2-2		笠付	天和3 (1683) 10月
50	〃大北				4-2-2		笠付	延享4 (1747) 4月
51	〃内川内	○					剣形	真享4 (1687) 12月
52	〃内川内				4-2-2		剣形	-
53	〃日比宇	○					剣形	享保4 (1719) 8月
54	〃日比宇				4-3-2		舟形	享保14 (1729) 10月
55	〃瀬津原				4-0-0		剣形	延宝2 (1675) 3月
56	〃瀬津原				4-2-2		剣形	享保□3月
57	〃瀬津原	○					剣形	延宝5 (1677) 10月
58	〃瀬津原				6-3-0		剣形	元文5 (1741) 2月
59	〃瀬津原	○					剣形	真享5 (1688) 2月
60	〃森藤				6-3-2		剣形	-
61	〃森藤				4-2-2		笠付	元禄10 (1697) 10月
62	〃弓道				4-2-2		笠付	享保4 (1719) 12月
63	〃弓道	○					剣形	元禄6 (1693) 11月
64	〃弓道				4-2-2		舟形	正徳3 (1713) 9月
65	〃谷口カケ				6-3-2		笠付	明和6 (1769) -
66	〃谷口カケ				6-3-2		笠付	安永6 (1777) 1月
67	〃谷口カケ				6-2-2		剣形	宝暦9 (1759) 9月
68	〃谷口カケ	○					角形	享保12 (1729) 12月
69	〃谷口				4-2-2		笠付	宝永1 (1704) 11月
70	〃谷口				4-2-2		剣形	-
71	〃谷口				4-2-2		舟形	享保2 (1717) 11月
72	〃谷口			○			剣形	昭和21 (1946) -
73	〃太合	○					角形	元禄4 (1671) -
74	〃太合	○					角形	享保8 (1723) -
75	〃太合				6-3-2		舟形	天保6 (1835) 10月
76	〃太合				4-2-2		舟形	-
77	〃川上	○					剣形	延宝5 (1677) 12月
78	〃川上					○	舟形	-

(注) 青面金剛の6-3-2の数字は、左は青面金剛の手、中は猿、右は鶏の数を表す。

表4 木屋平の庚申塔年代別造塔数

年紀	西暦	文字塔			刻像塔		合計
		奉供養 待庚申	青 金 面 剛	猿田彦	青 金 面 剛	猿田彦	
明暦	1655～						
万治	1658～						
寛文	1661～	3			1		4
延宝	1673～	3			1		4
天和	1681～	1			1		2
貞享	1684～	3					3
元禄	1688～	8			3		11
宝永	1704～				2		2
正徳	1711～				2		2
享保	1716～	3			6		9
元文	1736～				1		1
寛保	1741～				1		1
延享	1744～				3		3
寛延	1748～	1			2		3
宝暦	1751～				4		4
明和	1764～				5		5
安永	1772～				4		4
天明	1781～				1		1
寛政	1789～						
享和	1801～						
文化	1804～	1			1		2
文政	1818～	1					1
天保	1830～				1		1
弘化	1844～						
嘉永	1848～						
安政	1854～						
万延	1860～						
文久	1861～						
元治	1864～						
慶応	1865～						
明治	1868～						
大正	1912～			1			1
昭和	1926～			1	1		2
小計		24	0	2	40	0	66
年紀不明・なし		0	0	0	10	2	12
合計		24	0	2	50	2	78

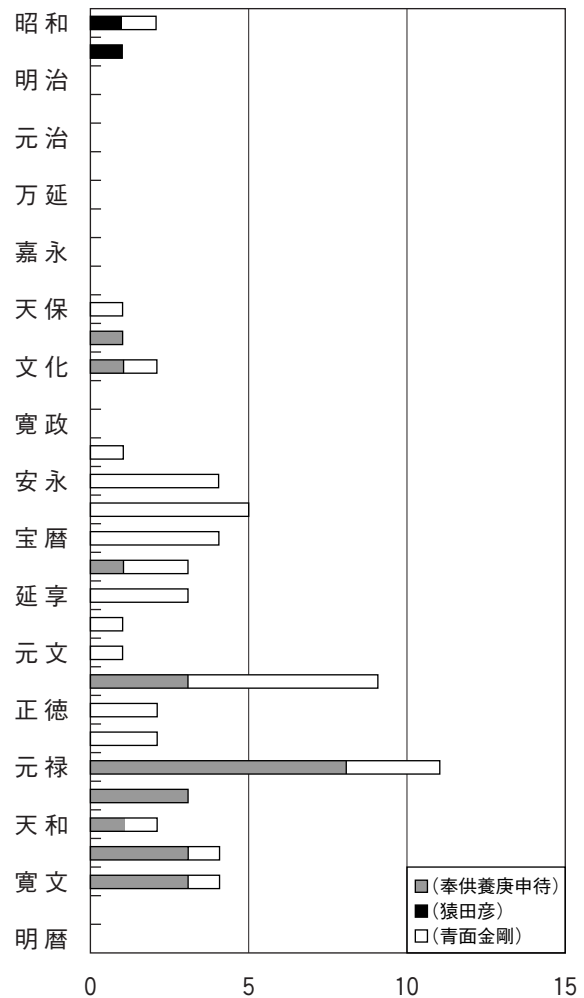


図8 庚申塔造立数の変化



図7 谷口の猿田彦文字塔

の市場町から6年後である。また種類別では、図8のように、文字塔は江戸前期から中期にかけて多く造られ、元禄期から青面金剛像に変わっていったことがわかる。この傾向は市場町や阿波町の調査結果とも一致しており、江戸中期に青面金剛が庚申信仰の主尊として定着したことを示している。

#### 4) 七庚申巡り

今回の調査中、<sup>あさぎぬ</sup>麻衣で「七庚申巡り」の話聞いた。これは庚申の日に、集落の人々が<sup>ちちのき</sup>櫛木、麻衣地区に存在する7つの庚申塔を巡り歩くというものである。7つの庚申塔の中には昭和2年(1927)のものもあるので、聞き取りと合わせて考えると、木屋平の庚申信仰は昭和10年代まで盛んであったことがわかる。庚申塔の造立場所は、お堂周辺が最も多いが、旧道に沿って多数存在していることも木屋平

の特徴である。

### 5) 消えゆく庚申信仰

今回の調査では、庚申塔が杉林の中で倒れたままになっていたり、谷に落ちて台石だけが残っている場所に遭遇した。また民家に近い場所を除くと、水や花が供えられていない石仏は多かった。

今丸で子供時代を過ごした婦人からの聞き取りによると、太平洋戦争前までは地蔵堂の祭りには子供が大勢集まってきて、大人が付き添いをして子供たちが地蔵尊を抱いてお堂の周りを歩きながら、「お地蔵さん、あっちが菅蔵ですよ。こっちが二戸ですよ」と話しかけていたという。土地に息づいてきた民間信仰が、次の世代に受け継がれていた様子がうかがわれた。現在今丸の地蔵堂に祀られていた六地蔵は、中村山の真福寺に保管されていて、本尊のなくなったお堂が樹木に覆われてひっそりと残っていた。

今回の調査を通して、民間信仰は急速に消えつつある状況がわかった。衰退の原因はいくつか考えられるが、その一つとして、太平洋戦争の影響が上げられるだろう。さらに、現在進行中の山村の高齢化と過疎化も大きな要因になっていると考えられる。これらは何も木屋平に限ったことでなく、かなり以前から県内はもとより日本の山村の至る所で見聞も

し、指摘されてきた状況である。

## 5. おわりに

今回の調査では、各集落で守られてきたお堂や仏像、石仏を通して、木屋平の庚申信仰を見てきた。その中で、竹尾の阿弥陀堂で初めて青面金剛像に直面したときの感動は忘れられない。お堂を中心として民間信仰が残っていることを知り、木屋平で受け継がれてきた豊かな精神文化の一端にふれることができたのは幸いであった。信仰の証としてのお堂や仏像、石仏などの文化遺産を、どう生かして行くかは今後の課題である。

調査期間中、地元の皆様から大変な親切を受けた。温かいご指導をいただいたり、現地までご案内を下された地元の皆様に、深く謝意を表して結びとしたい。

### 参考文献

1. 木屋平村 (1973)：木屋平村史
2. 阿波のお堂の習俗研究会 (1988)：阿波のお堂
3. 木屋平村 (1996)：木屋平村史
4. 真鍋俊照 (2004)：日本仏像事典
5. 徳島県立図書館 (2007)：阿波学会紀要 第53号
6. 徳島県文化振興財団 (2008)：日開谷川流域の民俗